

協業の概念について

今 井 祐 之

1 問題の提起

範疇的な資本主義的生産では、資本家は資本の人格化であるのに過ぎず、従って資本家が労働する場合にはただ資本の人格化としてのみ労働しなければならない。すなわち、資本家は直接的労働から解放されていなければならない。そのためには、この資本家によって雇用される労働者は、この資本家が直接的労働に従事しなくてもよいだけの剰余価値を生産しなければならない。それ故に、そもそも資本主義的生産は資本家が多数の労働者を雇用しているということを前提する¹⁾。

われわれが既に見たように、同じ個別資本 [dasselbe individuelle Kapital] がかなり多い人数の労働者を同時的に雇用するようになった場合、従って労働過程が自己の範囲を拡張し、ヨリ大きな量の規模で生産物を提供するようになった場合に、事実上初めて、資本主義的生産が始まる。かなり多い人数の労働者が同じ時間に、同じ空間（または同じ労働場所と言ってもよい）で、同じ商品種類の生産のために、同じ資本家の指揮権の下で働くということが、歴史的にも概念的にも資本主義的生産の出発点をなす。生産様式そのものに関しては、例えば初期のマニュファクチュアをツunft的な手工業的工業から区別するものは、同じ資本によって同時的に雇用される労働者の人数がヨリ多いということの他には殆どない。〔初期のマニュファクチュアでは、〕単にツunftの親方の仕事

場が拡張されているのに過ぎない。〔KI (2. Auflage), S. 319〕

ここで、第一の問題が生じる。もし資本家が多数の労働者を雇用しているということが協業と呼ばれるならば、協業こそは資本主義的生産の「出発点」であるということになる。

このような考えに基づいて明示的にであれ暗黙的にであれ資本主義的生産の「出発点」での生産様式と協業とを同一視する態度は主流的な態度であろう。そもそも戦後のマルクス経済学での主流的な態度の形成に貢献したと思われる『経済学教科書』が暗黙的に、また『資本論注解』が明示的に両者を同一視していた(ソ同盟科学院経済学研究所(1954), 第138頁; ローゼンベルグ(1961), 第330頁)。なお、その他には、両者を明示的に同一視しているものとして、例えば、以下のものが挙げられる。——原論では水谷(1974), 第110頁; 富塚(1976), 第113頁; 平田(1981), 第274頁; 角田(1992), 第137頁。経済史学では堀江(1962), 第104頁。技術論では仲村(1979), 第264頁; 青木(1990), 第38頁。経営学では角谷(1969), 第210頁。西欧マルクス経済学ではRosdolsky(1968), S. 281。

これに対して、本稿は資本主義的生産の「出発点」での生産様式と協業とを理論的に区別する。本稿と同様に両者を区別しているものとしては、樋口(1985), 第47~48頁が挙げられる。

次に、第二の問題が生じる。もし協業が資本主義的生産の「出発点」であるならば、協業は資本の下への労働の形式的包摂に属するということになるはずである。ところが、マルクス自身は明確に次のように述べている。——

これ〔=協業〕は、資本の下への労働の包摂がもはや単に形式的であるのに過ぎない包摂として現れるのではなく、しかるに生産様式そのものを変化させる——そしてそのことによって資本主義的生産様式が独自の生産様式になっている——最初の段階である。個別的労働者が独立的な商品所持者として労働するのではなく、いまでは、資本家のものになっ

ている労働能力として、それ故にまた資本家の指揮権と監督との下で、さらに、もはや自分のためにではなく資本家のために労働する限りでは、また労働手段ももはや労働者の労働の現実化のための手段として現れるのではなく、寧ろ労働者の労働の方が労働手段にとっての価値増殖の——すなわち労働を吸収するということの——手段として現れる限りでは、包摂は形式的である。この区別は、生産様式と生産が行われる社会的諸関係とが決して全く変化させられなくても実存し得るという意味では [so weit]、形式的である。協業とともに、はやくも独自の区別が生起する。労働は、個々人の独立的な労働が遂行されないような諸条件の下で行われる。しかも、これらの諸条件は個々人を支配するような関係として、資本が諸々の個別的労働に巻きつけるような紐帯として現れるのである。〔61—63, Teil 1, S. 235—236〕

あるいは、——

最も重要な点は依然として次のことである。——すなわち、これ〔＝単純協業〕は、労働の社会的性格を資本の社会的性格に移調させ、社会的労働の生産力を資本の生産力に移調させる最初のものであり、最後に、資本の下への〔労働の〕形式的包摂を生産様式そのものの実質的变化に転化させる最初のものである。〔Ebenda, S. 237〕

すなわち、マルクスによると、協業は実質的包摂の最初の段階なのである。

ところで、単純協業、本来のマニュファクトゥア、大工業の中でどれが実質的包摂に照応するのかという問題については、以下の三つの立場がある。

第一に、ただ大工業のみが実質的包摂に照応するという立場がある。これには、中村静治（中村（1985）、第33頁；中村（1992）、第167～170頁）、仲村政文（仲村（1979）、第267, 273, 276頁）、山口正之（山口（1975a）、第176～177頁；山口（1975b）、第131, 139, 144頁）などが含まれる²⁾。こ

の立場については別項で詳しく検討したい。

第二に、大工業と本来的のマニュファクチュアとが実質的包摂に照応するという立場がある。これには、宮本義男(宮本(1971), 第142, 148, 156頁), 山本二三丸(山本(1972), 第214~215頁)などが含まれる。本稿が直接的な批判対象として想定しているのはこの立場である。何故ならば、彼らが単純協業を実質的包摂から除外しているのは、彼らが暗黙的に資本主義的生産の「出発点」での生産様式と単純協業とを同一視しているということに基づいているからである。彼らの立場は寧ろ資本主義的生産の「出発点」での生産様式と単純協業との同一視の必然的な理論的帰結である。

第三に、大工業も本来的のマニュファクチュアも単純協業も実質的包摂に照応するという立場がある。これは恐らく多数説であろう。とは言っても、もし単純協業が資本主義的生産の「出発点」であるということが明示的/暗黙的に前提されるならば、この立場を主張するためには協業に対する形式的包摂の先行性の論証が困難になる³⁾。これに対して、本稿は、資本主義的生産の「出発点」での生産様式と単純協業との理論的区別によって、この立場を根拠づける。

本稿は協業は資本主義的生産の出発点であるのかという第一の問題、そして協業は実質的包摂に属するのかという第二の問題を解決するために、『資本論』での協業の概念を明確にする。以下では、第2節で協業の定義を検討し、第3節と第4節とでこの検討から生じる新しい問題を解決し、第5節で結論をまとめる。

2 協業の概念

2.1 協業の定義

『資本論』の第1巻第11章「協業」の第一段落は資本主義的生産の概念的な出発点を確認し、第二段落はこの出発点の量的な区別を検討している。第三段落は「かなり多数の同時に雇用されている労働者の総労働日」(KI (2. Auflage), S. 320) については「価値増殖の法則」が「個別な生産者た

ちにとって完全に実現される」(ebenda, S. 321) ということを取っている。第四段落と第五段落とは「かなり多数の労働者数の同時的な充用」(ebenda) による生産手段の共同利用が生産手段を節約するということを取っている。

注意されるべきであるのは、この五つの段落の総てを通じて「協業」という名辞はまだ使用されていないということである。「協業」という名辞が初めて使用されるのは第六段落でであり、そこでは協業が次のように定義されている。——

同じ生産過程で、あるいは相異なっても関連し合っているいくつかの生産過程で計画的に互いに協力し合って〔planmäßig neben und mit einander〕労働する多数の人々の労働の形態を、協業と言う。
〔Ebenda, S. 323〕

この定義で何よりも先ず注目されるべきであるのは「計画的に互いに協力し合って」という限定である⁴⁾。ところが、マルクスはこの限定を詳しく展開していない。それ故に、われわれが理論的に自覚的にこの限定を展開しなければならない。ここでは、この限定を「互いに協力し合って」という部分と「計画的に」という部分とに分けて考察してみよう。

2.2 協調性

第一に、協業では、同じ資本家のために同じ生産物を生産する「多数の人々」は互いに協力し合って労働しなければならない。ところが、彼らは「互いに協力し合って」労働するとは限らないのである⁵⁾。

資本の生産過程は商品の流通過程を前提する⁶⁾。商品の流通過程では、商品所持者たちは個別化された⁷⁾自立性にある——互いに疎遠な——個々人として相対する。資本と賃労働との交換でも、「この関係は彼ら〔＝「資本家と労働者」〕の取引の独自の内容によって始めから独自なものとして

〔eigen〕色付けられている」(Resultate, S. 89)とは言っても、この点は同じである。とは言っても、そこでは、一つの個別的資本の方は、多数の個別的労働者たちと交換するから、その限りでは生産過程に先行する流通過程で既に即自的には社会的である。これに対して、多数の個別的労働者たちの方は一つの個別的資本と交換するのであって、しかるに彼らの間で相互的に交換するのではない。それ故に、差し当たって⁸⁾、同じ資本家と交換する各々の個別的な労働者たちは互いに疎遠なままである⁹⁾。労働者たちは、流通過程で彼らの諸々の労働力が同一の資本家によって購買された後で、同一の資本の指揮権の下に疎遠なままで集聚させられる。ここから生産過程が始まる。同一の個別的資本との交換においては労働者たちは互いに疎遠であるから、労働者たちが互いに協力し合う関係はこの個別的資本の生産過程の内部で、しかも労働過程において新しく創造されなければならない¹⁰⁾。

資本主義的生産の「出発点」では、もちろん多数の労働者が労働するのだが、しかし労働者たちが互いに協力し合う関係は個別的資本の生産過程の内部でまだ創造されてはいない。それ故に、生産過程に先行する流通過程での疎遠性が生産過程でも継承されるしかない。すなわち、資本の生産過程に先行する商品の流通過程では労働者たちは互いに疎遠であるから、差し当たって彼らは互いに疎遠なままで労働するしかないのである。こうして、労働者たちの個人的労働過程は相互的に自立的であり、従ってまた諸々の個人的労働過程の集合もこのような自立的な個人的労働過程の単なる寄せ集めであるのに過ぎない。それ故に、まだ労働者たちの生産力は、個別化された個人的労働の生産力の単なる総和であるのに過ぎない。それ故にまた、この場合には、多数の労働者の充用によって資本主義的生産では労働過程は——ただ個人的な労働過程が寄せ集められているという意味でのみ——既にその「出発点」から即自的には社会的であるとは言っても、この社会性はまだ「交換の社会的性格」(Gr, Teil 2, S. 478)でしかないのである¹¹⁾。

これに対して、協業では、労働者たちは単に同時的に労働しているだけではなく、「互いに補完し合っている多数の人々」(KI (2. Auflage), S. 324)

として「互いに協力し合って」同時的に労働する。いまや労働者たちの個別化された自立性に替わって彼らの協調性が措定されている。もちろん、協業は「出発点」での生産様式を前提するが、この協調性という点でそれから区別される¹²⁾、¹³⁾。この協調性によって、単なる「同時的労働日」(Gr, Teil 1, S. 306 f; 61—63, Teil 1, S. 163 ff) ——「個別化された個人的労働日」(KI (2. Auflage), S. 326) の単なる総和——は「結合労働日」(ebenda) に転化され、諸々の個人的労働過程の集合は個別化された個人的労働過程の単なる寄せ集めではなく、一つの有機的な全体になる。

そもそも抽象的な諸契機における労働過程での労働は諸力の遊戯の媒介であった。労働において人間は自己の有機的・人間的自然の諸力の遊戯を媒介し、これによって自己の人間的自然と対象的自然との間での素材交換を媒介する¹⁴⁾。もちろん、抽象的な諸契機における労働過程は「この生活〔＝人間的生活〕のどの形態からも独立的であり、寧ろこの生活の総ての社会形態に等しく共通である」(ebenda, S. 198) から、このような媒介性は、多数の労働者たちが同じ個別的資本の指揮権の下で同時的に行う各々の個人的労働過程についても妥当する。

だがしかし、資本主義的生産の出発点では、もちろん各々の個人的労働過程の内部では諸力の遊戯が常に統御されているが、しかし諸々の個人的労働過程の——単なる寄せ集めとしての——集合の内部では各々の個人的労働過程それ自身がまだ諸力として遊戯してしまっている。すなわち、まだ諸々の個人的労働過程の集合が一つの力になっていてのではなく、各々の個別化された個人的労働過程が諸力として現れているのである。

これに対して、協業では、単に各々の個人的労働過程の内部で諸力の遊戯が媒介されているだけではなく、諸々の個人的労働過程の総体の内部でもまた各々の個人的労働の遊戯が媒介されているのである。こうして、諸々の個人的労働過程の総体についても、諸力の遊戯は諸力の媒介・統一に——マルクスが繰り返し引用しているトランシの表現では、「諸力の協同〔concoirs de forces〕」(KI (2. Auflage), S. 323N; 61—63, Teil 1, S. 237) に——なっ

ているのであり、このように媒介・統一された諸力は「一つの総力〔eine Gesamtkraft〕」(KI (2. Auflage), S. 323) になっているのである。こうして、資本主義的生産は、商品生産としては私的労働を前提しているのにも拘わらず、個別的資本の内部では社会的労働——単に個人的労働が寄せ集められているという意味ではなく、協調性によって個人的労働の自立性が止揚されているという意味で社会的な労働——を措定している。とは言っても、資本の直接的生産過程の内部では、諸々の労働力は資本の実存形態であるのに過ぎないから、この協調性もまた資本の協調性——疎遠な協調性——であるのに過ぎない。すなわち、結合されているのは資本という物象としての労働者たちであって、これに対して人格としての彼らは疎遠なままである。

——以上が「互いに協力して」という限定の意味である。それでは、次に「計画的に」という限定の考察に移ろう。

2.3 計画的

第二に、このように多数の個別的な労働者が個別的な資本の内部で互いに協力し合うためには、単に個別的な労働者の個人的な労働過程が一つの意志の下で自覚的に統御されなければならないだけでなく、この個人的な労働過程の総体——従って社会的な労働過程そのもの——もまた一つの意志の下で自覚的に統御されなければならない。

そもそも抽象的な諸契機における労働過程は自覚的に合目的な過程であった。労働過程では、人間は単に諸力の遊戯を媒介するだけでなく、諸力の遊戯を自覚的に媒介するのである。すなわち、そこでは、人間は実在的に生産する前に観念的に生産するのであり、そして実在的に生産する間には一つの意志の下に諸力の遊戯を媒介するのである¹⁵⁾。もちろん、やはりまた、このような自覚性は、多数の労働者たちが同じ個別的資本の指揮権の下で同時的に行う各々の個人的労働過程についても妥当する。

だがしかし、もし資本主義的生産の「出发点」でのように諸々の個人的労働過程が互いに協調的ではなく自立的であるならば、もちろん各々の個人的

労働過程は自覚的に合目的な過程であるが、しかし諸々の個人的労働過程の集合がそれ自体として自覚的に合目的な過程になっているわけではまだないのである。すなわち、この場合には、自立的な諸労働の連関は、そもそも単に多数の労働者たちが同一の資本の指揮権の下で同時に——あるいはせいぜいそれに加えて、同じ場所で——労働するというにしかないから、自己自身の自覚的な統御を要請してはいないのである。

これに対して、協業でのように多数の個別的労働者が個別的資本の内部で互いに協力し合うや否や、いまでは社会的労働過程そのものもまた自覚的に合目的な過程になっている。この自覚性はここでは、労働者たちの諸労働の連関そのものが一つの計画として観念的に指定されているという社会的な形態を受け取る。このようなものとして、協業は単なる協働ではなく、「計画的な協働〔das planmäßige Zusammenwirken〕」(ebenda, S. 326)なのである。こうして、資本主義的生産は、商品生産としては社会的総生産の無計画性を前提しているのにも拘わらず、個別的資本の内部では計画性を指定している。とは言っても、資本の直接的生産過程の内部では、やはり諸々の労働力は資本の実存形態であるのに過ぎないから、この計画性もまた資本の計画性——疎遠な計画性——であるのに過ぎない。すなわち、協業での計画は、個別化された労働者にとっては他人の計画であるのに過ぎない¹⁶⁾。

——以上が「計画的に」という限定の意味である。

2.4 小括

以上のことから明らかであるのは、個別的資本は多数の労働者を雇用する以上、資本主義的生産での労働の形態は常に(1)「多数の人々の労働の形態」であるとは言っても、それには(2)単なる「多数の人々の労働の形態」と(3)「計画的に互いに協力し合って労働する多数の人々の労働の形態」とがあるということ、そして、マルクスが協業と呼んでいるのはただ(3)のみであるということである。本稿の以下の部分では、われわれは(1)を“労働一般”(あるいは一言で“協働”), (2)を“単なる協働”, (3)を“本

来的な協業”(あるいは一言で“協業”)と呼ぶ¹⁷⁾。単なる協働は本来的な協業の前提であるが、本来的な協業ではない。

ところで、「全般的に見て単純協業は個々人の労働様式を不変なままにする」(ebenda, S. 354)。それ故に、単純協業では、資本は労働力¹⁸⁾を——従ってまた労働手段をも——まだ変化させない¹⁹⁾。しかし、協調性と計画性というこの二つの契機を通じて、資本は、個別的な個人的労働過程そのものを変化させてはいないが、個別化された個人的労働過程の単なる寄せ集め(即自的な社会的労働過程)を、それからは区別されるような社会的労働過程(対自的な社会的労働過程)に転化させるということによって、労働の「社会的諸編成」(KI (3. Auflage), S. 485)すなわち「労働過程の〔……〕社会的な諸条件を、従って生産様式そのものを変革し」(KI (2. Auflage), S. 313)ている。この一見するとあたかも幻想的であるかのように見える生産様式の変革が、個別化された個人的労働の生産力の単なる総和を越える社会的労働の生産力の創造という明白な結果を生み出すのである。ところで、資本主義的生産では、協業は資本がなければ実現され得ない。その限りで、単純協業の導入によって、資本は生産様式を自分自身で措定している。こうして、資本の下への労働の実質的包摂が生起しているのである。

3 冒頭部分の性格

それでは、協業の定義に先行して議論されている個別的資本家にとっての社会的平均の実現と生産手段の共同的利用による節約とは本来的協業に、従ってまた実質的包摂に含まれるのであろうか。

この問題への解答は事実上、既に与えられている。この両者は、同じ生産物を生産する多数の賃金労働者が「互いに協力し合って」労働するのであろうとなかろうとも、従ってまた「資本主義的生産の出発点」でも実存するのである²⁰⁾。それ故にまた、それらは、資本の下への労働の実質的包摂を齎す本来的協業の理論で考察されているとは言っても、それ自体としては、本来的協業に先行する形式的包摂に属するのである。

ここ〔=形式的包摂〕では、生産様式そのものには区別はまだ生じていない。〔……〕けれども、以前に展開したように、生産過程そのものの中で、〔……〕(2) 労働の高い連続性・強度と労働諸条件の充用におけるより大きな節約とが発展する。と言うのは、生産物がただ社会的に必要な（あるいは寧ろもっと少ない）労働時間のみを表示する——そしてこのことは、この生産物の生産に使われる生きている労働に関しても、また充用された生産手段の価値として価値形成的にこの生産物の中に入っていく対象化された労働に関しても当て嵌まる——ように、総てのものが傾注されるからである。〔Resultate, S. 97〕

それでは、何故にこの両者は資本の下への労働の形式的包摂を想定する絶対的剰余価値の生産でではなく、資本の下への労働の実質的包摂を想定する相対的剰余価値の生産で取り扱われなければならないのであろうか。

第一に、それらは個人的な労働過程に属する契機ではなく、単なる協働であろうと本来的な協業であろうとも社会的な労働過程²¹⁾に属する契機であるからである。

第二に、それらは生産様式を変革するのではないが、しかし商品の価格の低下によって相対的剰余価値の生産に貢献し得る——従って、その限りでは、実質的包摂に先行して、相対的剰余価値の生産が行われる——からである。すなわち、個別的資本の内部で個人的労働が均等化される場合に、もし単なる算術平均よりも少ない値に均等化されるならば——そして資本主義的生産はこのような傾向をもっている——、この均等化はその分だけ商品の価格を低下させる²²⁾。そして、もし或る商品の生産で生産手段が共同の利用によって節約されるならば、その生産手段の価格が安くなったのではないが、その生産手段が節約された分だけ²³⁾やはりこの節約はその商品の価格を低下させる。

4 根本形態としての協業

最後に、協業は、マルクスによるとそもそも「資本主義的な生産様式の根本形態」(KI (2. Auflage), S. 332) であるから、マルクスの規定では、資本主義的生産の「出発点」での生産様式をも——従って形式的包摂をも——包括してしまうのではないのかという問題が残っている。この問題に答えるために、われわれはマルクスが述べている「根本形態」の意味を明らかにしよう。——

これ〔=協業〕は根本形態である。分業は協業を前提する。あるいは、分業は協業の独自の〔spezifisch〕一様式であるのに過ぎない。機械設備に基づくアトリエ等も同様である。協業は一般的な形態なのであり、社会的労働の生産性を増大させるための総ての社会的な手立て〔Arrangements〕の根底にこの一般的な形態があるのであり、そしてそれらのどの手立てにおいてもこの一般的な形態が更なる特殊化〔Specification〕を受け取っているのに過ぎないのである。しかし同時にまた、協業それ自身も、自己の更に発展しヨリ高度に特殊化された諸形態と並んで実存するような特殊な形態である。〔……〕

自己自身の更なる諸発展または諸特殊化からは区別される——しかもそれらから区別され分離されて実存する——形態としては、協業は、自己自身の諸種の中で最も自然生的な、最も手が加わっていない、最も抽象的な種である。しかも、そうでありながら、協業はその単純性において——その単純な形態において——自己のヨリ高度に発展した総ての形態の基礎かつ前提であり続けるのである。〔61—63, Teil 1, S. 229〕

この引用から明らかであるように、「自己のヨリ高度に発展した総ての形態の基礎かつ前提」であるという意味で、しかも「社会的労働の生産性を増大させるための総ての社会的な手立ての根底に〔……〕ある〔zu Grund

liegen)」という意味で、協業は「根本形態 [Grundform]」なのである。それ故にまた、「資本主義的な生産様式の根本形態」という表現での「資本主義的な生産様式」とは「出発点」での生産様式を含むような資本主義的な生産様式のことではなく、独自に資本主義的な生産様式のことなのである²⁴⁾。

5 結論

本稿では、われわれは協業の概念の検討によって単なる協働と本来的協業との区別を明確にした。また、この区別に基づいて、協業の導入は生産様式の変革であるということ、それ故にまた協業の導入によって資本は自己の下へ労働過程を実質的に包摂するというをも明確にした。通説においてしばしば明示的／暗黙的に前提されている資本主義的生産の「出発点」での生産様式と資本主義的単純協業との同一視は否定されなければならない。

参考文献

引用文中では、傍点での強調は著者自身、下線での強調は今井による。

略称

MEGA², Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe, Dietz Verlag Berlin.
61—63, *Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861—1863)*. In:
MEGA² II/3. 1—6.

Einleitung, *Einleitung zu den „Grundrissen der Kritik der politischen Ökonomie“*, *Ökonomische Manuskripte 1857/58*. In: MEGA² II/1. 1.

Gr, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Ökonomische Manuskripte 1857/58*. In: MEGA² II/1. 1—2.

Hauptmanuskript, *Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863—1865) Drittes Buch, Ökonomische Manuskripte 1863—1867*. In: MEGA² II/4. 2.

KI (2. Auflage), *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Erster Band. Hamburg 1872*. In: MEGA² II/6.

KI (3. Auflage), *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Erster Band. Hamburg 1883*. In: MEGA² II/8.

Resultate, *Sechstes Kapitel. Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses*,

Das Kapital (Ökonomisches Manuskript 1863—1865) Erstes Buch, Ökonomische Manuskripte 1863—1867. In: MEGA² II/4. 1.

文献

- Rosdolsky, Roman (1968), *Zur Entstehungsgeschichte des Marxschen ›Kapital‹: Der Rohentwurf des Kapital 1857—1858*, Bd. 2, Europäische Verlagsanstalt.
- 青木司 (1990), 『情報化と技術者』, 青木書店
- 大野節夫 (1979), 『生産様式と所有の理論』, 青木書店
- 角田修一 (1992), 『生活様式の経済学』, 青木書店
- 角谷登志雄 (1969), 『労働と管理の経済理論』, 青木書店
- ソ同盟科学院経済学研究所 (1954), 『経済学教科書』, マルクス・レーニン主義普及協会 (訳), 第1分冊, 合同出版社, 1955年
- 富塚良三 (1976), 『経済原論——資本主義経済の構造と動態』, 有斐閣
- 中村静治 (1985), 『生産様式の理論』, 青木書店
- (1992), 『現代世界とマルクス理論の再生』, 大月書店
- 仲村政文 (1979), 『分業と生産力の理論——史的唯物論と生産力』, 青木書店, 1979年
- 樋口徹 (1985), 「第11章 協業」, 富塚良三・服部文男・本間要一郎 (編) 『資本論体系』, 第3巻, 有斐閣
- 平田清明 (1981), 『コンメンタール『資本』』, 2, 日本評論社
- 堀江英一 (1962), 『改訂・産業資本主義の構造理論』, 有斐閣 (「産業資本主義の構造理論」, 『堀江英一著作集』, 第4巻, 青木書店, 1976年, から引用)
- 水谷謙治 (1974), 『労働疎外とマルクス経済学』, 青木書店
- 宮本義男 (1971), 『資本論の論理体系』, 日本評論社
- 山口正之 (1975a), 『経済の科学——変革期の経済学』, 青木書店
- (1975b), 『社会革新と管理労働』, 汐文社
- 山本二三丸 (1972), 『経済学概論』, 青木書店
- ローゼンベルグ, デ・イ (1961), 『資本論注解』, 副島種典・宇高基輔 (訳), 第2巻, 青木書店, 1962年

1) 「一人の労働者の各々に一人の資本家がつくということとはあり得ないのであって、或る程度の量 [=人数] の労働者が一人の資本家につくのでなければならぬ。一人か二人かの職人が一人の親方につくのととは違うのである」(Gr, Teil 2, S. 477).

これに対して、資本家がまだ直接的労働から解放されていないような生産は過渡的形態であるのに過ぎない。——「もちろん彼〔＝資本家〕自身が彼の労働者と同様に直接的に生産過程で働く〔Hand...anlegen〕ということもありうるが、しかしその場合にはその場合で、彼は資本家と労働者との中間物、『小親方』であるのに過ぎなくなってしまう。或る一定の高度の資本主義的生産は、資本家が、資本家として、すなわち人格化された資本として機能する全時間を他人労働の取得、それ故にまた他人労働の統御に、そしてこの労働の生産物の販売に使用し得るということを条件にする」(KI (2. Auflage), S. 308)。そして、もちろん、「資本の現在の歴史」(Gr, Teil 2, S. 368)に即して理論的な対象になり得るのはただ「或る一定の高度の資本主義的生産」のみである。

- 2) 但し、山口は「マニュファクチュアは、形態的包摂から実質的包摂への移行を媒介する過渡形態だということもできる」(山口 (1975a), 第 177 頁)とも主張している。
- 3) 例えば、堀江英一は、既に見たように明示的に単純協業が資本主義的生産の「出発点」であるということを手張した(堀江 (1962), 第 104 頁)上で、また形式的包摂と絶対的剰余価値の生産との照応関係を承認した(同上, 第 101 頁)上で、「それ自身としての絶対的剰余価値の生産の歴史的存在形態は『小親方』または『富農』であって、まださきに述べた厳密な意味における『資本主義的生産』ではない」(同上, 第 102 頁)と主張している。つまり、堀江によると、包摂の特殊の形態としての形式的包摂は資本の下への労働の包摂ではなく、「小親方」の下への労働の包摂であるということになる。しかし、明らかに形式的包摂を念頭に置きながら、マルクスは、「最初には、同時に搾取される労働者の人数——それ故に生産される剰余価値の総量——が労働充用者自身を手労働から置き放ち、小親方を資本家にし、こうして資本関係を形式的につくり出すのに十分なものになるためには、個別資本〔individuelles Kapital〕の一定の最小限の大きさが必要なものとして現れた」(KI (2. Auflage), S. 327)と叙述している。すなわち、マルクスの主張では、形式的包摂の成立要件には「小親方」が既に資本家に転化しているということが含まれているのである。本稿は、形式的包摂が成立する「出発点」と実質的包摂が成立する協業との区別によって、形式的包摂は「小親方」の下への労働の包摂ではなく資本の下への労働の包摂であるということ、しかもこの包摂は一つの特殊の形態として実質的包摂から区別されるということを明確にする。

これに対して、大野節夫は「『規模の拡大』は最初から存在した。そして、これが以前の生産様式と量的変化にすぎないものであらうと、『生産様式そのもの』

の変化であり、資本家的生産様式の成立を告げるものである。すでにみたように『規模の拡大』は〔……〕必然的に一定の労働様式、協業を実現するのである。〔……〕資本は、それゆえ、労働を包摂するとともに、はじめから生産様式を変化させるのである」(大野(1979), 第57頁)と述べた上で、「それゆえ、『形式的包摂』『実質的包摂』の区分は矛盾をはらんでいる。『形式的包摂』を歴史的段階としてとらえようとしてもかかる想定は不可能である」(同上, 第58頁)とか、「『資本のもとへの労働の形式的包摂』という独自の段階は存在しない」(同上)とかと結論している。つまり、大野によると、形式的包摂は——包摂の一般的形態ではあるが——そもそも包摂の特殊の形態ではないということになる。しかし、第一に、相対的剰余価値の生産あるいは資本の下への労働の実質的包摂で問題になるのは単なる「規模の拡大」ではなく、「生産様式における〔……〕革命[eine Revolution [...] in seiner Produktionsweise]」(KI (2. Auflage), S. 313)であり、「生産様式そのものを変革する[*die Produktionsweise selbst umwälzen*)]」(ebenda)ということである。そして、第二に、本稿が明らかにするように、「最初から存在した」ような単なる「規模の拡大」が協業ではないのに対して、協業は生産様式を質的に変革する。この二つの論拠に基づいて、本稿は実質的包摂に対する形式的包摂の先行性を明確にする。

4) その他に、この定義では、第一に、「同じことあるいは同種のこと」(KI (2. Auflage), S. 324)という限定は含まれていない。何故ならば、“異なること”——それが部分労働者の専門的機能に骨化していようといまいとも——を行う多数の人々の協業もやはり協業であるからである。しかし、「同じことあるいは同種のこと」を行う協業は“異なること”を行う協業の前提であり、従ってそれに先行する。それ故に、本稿は協業として単純協業を想定する。

第二に、協業するのは「多数の人々[Viele]」であって、しかるに“多数の賃金労働者”ではない。何故ならば、協業は人類史の端緒から営まれてきたものであり、また「資本主義時代の達成物」(KI (3. Auflage), S. 713)として自由なアソシエーションにも継承されなければならないものであるからである。もちろん、本稿は協業として資本主義的協業を想定する。

5) 個別的資本家にとっての社会的平均の実現について、マルクスは次のように述べている。——「12人が互いに手を取り合って[*einander in die Hand*]労働するのか、それとも彼らの労働の全連関はただ彼らが同じ資本家のために労働するというのみにあるのかということには全く関わりなく、各個々人の労働日は総労働日の可除部分として実存する」(KI (2. Auflage), S. 321)。

同様にまた、共同の利用による生産手段の節約について、マルクスは次のよう

に述べている。——「そして、それ〔=生産手段〕は、〔……〕社会的労働の条件または労働の社会的条件としてのこの性格を、多数の人々が協力して〔mit einander〕労働するのではなく、単に空間的に集まって労働するのに過ぎない場合にさえ、受け取るのである」(ebenda, S. 322)。

これらの引用から解るように、多数の労働者たちが「互いに協力し合って〔neben und mit einander〕労働する」場合と、多数の労働者たちの「労働の全連関はただ彼らと同じ資本家のために労働するというのみにある」場合、または多数の労働者たちが「単に空間的に集まって労働するのに過ぎない場合」とを、マルクスは明確に区別しているのである。

なお、マルクスが協業の特徴付けにおいて „einander“ という規定性を強く意識していたということについては、次の叙述をも参照せよ。——「多数の人々が同じことあるいは同種のことを同時に協力して〔mit einander〕行う〔……〕」(ebenda, S. 324)。「客馬車マニュファクチュアは、これら様々な手工業者たちの総てを一つの仕事場に集めて一体化させ〔vereinigen〕、そこで彼らは同時に互いに手を取り合って〔einander [...] in die Hand〕労働する」(ebenda, S. 332——但し、これはマニュファクチュアの第一の起源についての叙述である)。

6) 「資本の形成の歴史」(Gr, Teil 2, S. 368)に即しては、この想定は、資本主義的生産の「出発点」は自己の対立物として「小経営」(KI (3. Auflage), S. 711)を想定するということである。——「とは言っても、歴史的には、それ〔=協業の「資本主義的な形態」〕は、農民経営に対立して、また独立的な手工業経営〔……〕に対立して発展する」(KI (2. Auflage), S. 331)。「〔……〕協業そのものも個別化された独立的労働者たちや小親方たちやの生産過程に対立する資本主義的生産過程の独自の形態として現れる」(ebenda)。「資本主義的生産様式は、生産手段が事実上または法律上耕作者自身の所有物であるようなそれ以前の諸生産様式から〔……〕出発する」(Hauptmanuskript, S. 785)。

7) 本稿では、「個別化されている〔vereinzelt〕」ということは単に個別的になっているということではなく、互いに疎遠になっていることを意味する。——「18世紀に初めて——『市民社会〔bürgerliche Gesellschaft〕』で初めて——、社会的連関の様々な形態は個人人の私的諸目的のための単なる手段として、外面的な必然性として、個人人に相対するようになる。しかし、この立場——個別化された個人人〔der vereinzelte Einzelne〕の立場——を生み出す時代は、まさに、これまでの中で最も発展した社会的〔……〕諸関係の時代なのである」(Einleitung, S. 22)。すなわち、個人人は常に個別的であるが、ただ互いに疎遠

な私的個人としてのみ個別化されているのである。

- 8) 労使(資)間での団体交渉は生産過程での敵対的な社会性が流過程で暴露されたものである。自由・平等・所有という流過程での抽象的な原理そのものからは団体交渉は発生し得ない。それ故にまた、流過程での労働者たちのこのような団結は、生産過程での彼らの物的な——資本の実存形態としての——結合によって根拠付けられるべきであろう。
- 9) 「資本の方は労働者たちと社会的に交換するが、しかし労働者たちの方は資本と個別的に交換する」(Gr, Teil 2, S. 478)。「独立的な人格としては労働者たちは個別化された者たちであり、この個別化された者たちは同じ資本に対しては関係を結ぶが、しかし互いに対しては関係を結ばない」(KI (2. Auflage), S. 329).
- 10) 「労働者たちの協業は労働過程で初めて始まる [……]」(KI (2. Auflage), S. 329).
- 11) 「従って、資本による生産が始まるのは、常に、或る程度の大量の社会的富が既に一人の手中に集積されているような段階、従って客体的にはこの大量の社会的富が資本として——直ちには [sofort] 多数の労働者たちとの交換として、後には [später] 多数の労働者たちによる生産、労働者たちの結合として——現れており、或る程度の分量の生きている労働能力を同時的に働かせ得ているような段階である。このように、最初から資本は集合力、社会的な力として、そして個別化の止揚——まずは [zuerst] 労働者たちとの交換の個別化の止揚、次には [dann] 労働者たちそのものの個別化の止揚——として現れるのである」(Gr, Teil 2, S. 480).

この文集団はそのままではやや解りにくいから、注釈が必要であろう。この文集団の前の段落では、「多数の労働者たちとの交換」または「労働者たちとの交換の個別化の止揚」は、「生産様式そのものはまだ資本によって規定されているのではなく、資本によって眼前に見出されている [vorgefunden sein]」(ebenda, S. 477) ような「資本としての貨幣が自己を自由な労働と交換するための第一の条件」(ebenda, S. 478) ——すなわち形式的包摂——について言われていたのであり、そして、「多数の労働者たちによる生産」または「労働者たちそのものの個別化の止揚」は、「資本は、もはや、その眼前に見出される生産様式の中に労働者たちを置いたままで、この基礎上で自己の威力を打ち建てるのではなく、自己に照応する生産様式を、基礎として自分のために創り出す」(ebenda) ような「第二の条件」(ebenda) ——すなわち実質的包摂——について言われていたのである。

- 12) 「出发点」での生産様式は協業の前提ではあるが、協業ではないのである。

- 「この変化〔＝協業において「現実的な労働過程が資本の下への自己の包摂を通じて経験する最初の変化」, すなわち最初の実質的包摂〕の前提——同じ労働過程でかなり多数の人数の賃金労働者を同時的に雇用するという——は資本主義的生産の出発点をなす。この出発点は資本そのものの定在に一致する」(KI (2. Auflage), S. 331).
- 13) 先行的諸形態での協業が前提する個人が共同体の臍帯から分離されていない個人であるのとは異なって、資本主義的協業が前提する個人は個別化された個人である。だからこそ、労働する諸個人が「互いに協力し合って」労働する関係は、先行的諸形態では労働過程に直接的に前提されているのに対して、資本主義的生産では——その「出発点」ではまだ措置されていなく——労働過程の中で措置されなければならないのである。しかし、このような回り道を通るということによって、資本は先行的諸形態での協業の共同体的な狭隘性を突破する。
- 14) 「自然素材に対して人間はそれ自身、自然の一威力として相対する。自分自身の生活〔＝生命〕のために使用し得る形態で自然素材を取得するために、人間は自己の肉体性——腕や脚、頭や手——に具わっている自然諸力を運動させる。〔……〕人間は自分自身の自然の内に眠っている諸々の潜勢力を發展させ、そして自分自身の自然の諸力の遊戯を自分自身の統御に服させる」(KI (2. Auflage), S. 192).
- 15) 「蜘蛛は織匠の作業に似ている作業を行うし、また蜜蜂はその蠟の小室の建築によって多くの人間建築師を赤面させる。しかし、建築師は小室を蠟で建築する前に既に頭の中で建築しているということによって、最悪の建築師さえ最良の蜜蜂より始めから卓越している。労働過程の終わりには、労働過程の始めに既に労働者の表象の中に、従ってまた既に観念的に現存していた結果が出てくるのである。労働者は自然的なものの形態変化を引き起こすだけではなく、それと同時に自然的なものにおいて自己の目的を現実化させるのである。労働者はこの目的を知っており、この目的は労働者の行為するという事〔Thun〕の仕方・様式を法則として規定し、労働者は自己の意志をこの目的の下に従属させなければならない。そして、このように従属させるということは個別化された行動ではない。労働の全持続期間に亘って、労働する諸器官の緊張が必要になるだけではなく、注意力として現れる合目的な意志が必要になる〔……〕」(KI (2. Auflage), S. 193).
- 16) 「それ故に、賃金労働者たちの労働の連関は観念的には資本家の計画として、実践的には資本家の権威として——賃金労働者たちの行為するという事〔Thun〕を自己の目的に従わせる他人の意志の威力として——賃金労働者たち

に相対する」(KI (2. Auflage), S. 328).

- 17) 単なる協働と本来的な協業とのこのような内容的区別をマルクスは、『資本論』だけではなく、『経済学批判要綱』でも『61—63年草稿』でもまた堅持している。但し、それらでは、マルクスは『資本論』で採用したような厳密な意味で「協業」という名辞を使用していないから、注意が必要になる。

先ず、『経済学批判要綱』の例を挙げよう。——「つまり、この形態では、生産様式そのものはまだ資本によって規定されているのではなく、資本によって眼前に見出されているのである〔vorgefunden sein〕。これらの散在する労働者たちを統一する点は、資本に対して彼らが交互的に関連するという事の中にしかない〔……〕。彼らが〔対自的に〕協働する〔zusammenarbeiten〕のではなく彼らの一人ひとりが資本のために労働する——それ故に資本の中に中心点をもつ——限りでは、彼らが協働する〔zusammenwirkend〕労働として実存するのは単に即自的にでしかない。だから、資本による彼らの一体化は単に形式的であるのに過ぎないのであり、そして、ただ労働の生産物にのみ当て嵌まるのであって、労働そのものには当て嵌まらないのである」(Gr, Teil 2, S. 477—478)。本稿での用語法に従うと、ここでは「即自的」な協働が単なる協働を、また対自的な協働が本来的な協業を指している。同様に、労働での資本による労働者たちの「形式的」な一体化が単なる協働を、また労働での資本による労働者たちの実質的な一体化が本来的な協業を指している。

次に、『61—63年草稿』の例を挙げよう。——「その各々が2時間の剰余労働をする10人の労働者の代わりに20人の労働者が充用されるならば、その結果は第一の場合での20剰余時間の代わりに40剰余時間である。〔……〕割合は、20人についても1人についても同じである。〔……〕協業それ自体〔Cooperation als solche〕は、ここでは、この割合に全くなんの〔absolut〕変化をも齎さない。これに対して、ここではわれわれは、協業を、個々人の労働が孤立化された個々人の労働としては受け取らないであろうような生産性を協業によって獲得する限りでの社会的労働の自然力として、考察するのである」(61—63, Teil 1, S. 231)。本稿での用語法に従うと、ここでは、「協業それ自体」が単なる協働を、また「社会的労働の自然力として」の協業が本来的な協業を指している。

- 18) マルクスは『資本論』の第10章「相対的剰余価値の概念」の最後で次のように叙述している。——「この結果〔=必要労働時間の短縮による剰余労働時間の延長〕が、商品を安くしなくてもどの程度まで達成され得るのかということは相対的剰余価値の特殊的な諸生産方法において示されるであろう〔……〕」(KI (2. Auflage), S. 319)。ところが、「相対的剰余価値の特殊的な諸生産方法」の一つ

- である協業を取り扱う第11章では、このようなことは「示され」てはいない。言うまでもなく、その理由はそもそも単純協業では労働力が変化しないということにある。労働力の変化による必要労働時間の短縮はただ本来的マニファクチュアと大工業とにおいてのみ現れるのである。
- 19) これに対して、「生産様式の変革はマニファクチュアでは労働力を出発点にし、大工業では労働手段を出発点にする」(KI (2. Auflage), S. 363).
- 20) 注5での引用を参照せよ。更に、共同的利用による生産手段の節約については、次の引用をも参照せよ。——「労働手段の一部はこの社会的性格を、労働過程そのものが社会的性格を獲得する前に、獲得する」(KI (2. Auflage), S. 322).
- 21) ここで「社会的な労働過程」という表現は個人的な労働過程ではないという否定的・消極的な意味で用いられている。この用法では、単なる協働も即目的には社会的労働過程である。但し、一般的にマルクスはただ対目的な社会的労働過程——本来的協業——のみを「社会的な労働過程」と呼んでいる。
- 22) なお、「所与の場合にそれ〔＝「結合労働日」〕がこの上昇した生産力を受け取るのが〔……〕個人的労働に社会的平均労働という性格を与えるからであろうと——、どの事情の下でも、結合労働日の独自の生産力は労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である」(KI (2. Auflage), S. 326) という規定もこの意味で理解されるべきであろう。
- 23) 「その結果〔＝共同的利用による生産手段の節約の結果〕は、ちょうどこの商品の生産手段がより安く生産されるようになったようなもの〔dasselbe, als ob ...würden〕である」(KI (2. Auflage), S. 322).
- 24) 「資本主義的生産過程の総ての発展した形態は協業の諸形態である〔……〕」(KI (2. Auflage), S. 496N).

(一橋大学大学院博士課程)